

○七月の進級者左の如し

幼年四級へ 木村徳太郎

幼年五級へ 森本利三郎、田鎖藤太郎

四級へ 服部清吉、井戸虎雄、杉浦壽作、植松雅道

三級へ 小寺源吾

二級へ 増岡次郎、金澤冬三郎、中村愛作、清水伊勢吉、倉田敬三

一級へ 田中信藏、島津理左衛門

○又十一月頃進級の發表に依れば

四級へ 武内吉次、濱田精藏、小泉浩、佐藤文彌

三級へ 柳彌五郎、堀切善兵衛、吉田兵藏

## 五 明治三十四年史

### (一) 寒 稽 古

一月十三日より開かれたる寒稽古皆勤者は、有級者十三名、無級者四十四名であつて、其稽古本數四百本以上のもの左の通りであつた。

## (有級者)

七三五 服部 清吉 六六〇 吉堀 誠一 六一七 田中 信藏 五七三 向山 昌治 五四六 森本利三郎  
 四九三 吉田 兵藏 四二三 柴田 一能 四一八 濱田 精藏 四〇〇 須田 卓二 以下四名略

## (無級者)

七四〇 南 保一 五二二 潤良 是助 五〇九 水野不美男 五〇一 小野 秀一 五〇〇 越中谷吉次  
 四八四 中島重次郎 四七七 小島 三徳 四七二 海江田平八郎 四二七 平賀恒次郎 四〇五 笹尾 真  
 四〇五 濱田 隆一 以下三十三名略

右五十七名の皆勤者に對するメタル及び持勤證授與式は、二月二十三日の夕に開かれ、續いて茶話會が催された。餘興として金澤氏獨特の改良講談(經國美談)、柴田氏の落語、田中氏の浪花節等あり、各得意のことなれば、其道の藝人を凌ぐ程の腕前にて大に喝采を博した。其他擬馬戦争等ありて、何時もながらの盛會であつた。

## (二) 福澤先生の逝去

我が塾は、福澤先生を中心として三田山上に一大家庭を作り、學生各自の氣品を高め、理性の開發にいそしんで來たのであるが、先生は明治三十四年一月二十五日に至り、先年一度快癒したる脳溢血の大患再び發して、名醫の總ゆる手當もその効なく、二月三日午後十時五十分、遂に溘焉として此の世を去られた。塾としても柔道部としても、大師傅たり大慈父たる恩人を失ひたるものであつて、門下生一同の悲嘆其の極に達し、日本全國も哀愁の雲に鎮され、天地爲に闇きを覺えた。

福澤先生は、草莽の間に身を起し、夙に世界の趨勢を達觀して洋學に志し、總ゆる艱苦と戰つて、三百年間鎖國の迷夢を一掃し、舊弊を打破し、遂に我が日本を文明開化の域に進め、維新の先覺者となり、新日本の建設者となつたのであるが、此等のことにしては編者の贅言を要せざる所である。こゝには唯福澤先生の國士的一面、體育と柔道に對する先生の態度に就き、聊か管見を記するに止める。

人は勢に乗ぜざる可らず、又勢を制せなければならぬ。勢に乗ずるは其人多からんも、勢を制するは其人極めて稀である。福澤先生の事蹟を見るに、確乎たる主義主張の上に立ちつゝ、その爲すところ、全局面より経畫し來りて、而して僅に其一端をば、機に臨み變に應じて、或は之を説き、或は之を行つたのであるから、活眼を開いて其全豹を通觀する者でなければ、門外漢からは往々にして意外の誤解を招くこともあつたのである。

先生が少壯にして洋學に没頭するや、時人其眞意を解せず、先生を目にするに國賊を以てし、爲に暗殺の危難を感じたことは、幾度びなるかを知らざる程であつた。古來の階級制度を蛇蝎視し、洋學を以て漢學に代へんとし、丁寧を卑しみ、帶刀を『馬鹿メートル』と呼びたること、當時の頑迷固陋なる輩より見れば、正に國賊たるの觀があつたのである。その時の苦心を先生回顧して、『凡そ文久年間から明治五六年まで十三四年の間と云ふものは、夜分外出したことはない。其間の仕事は何だと云ふと、唯著書翻譯にのみ屈託して歲月を送つてゐた』といふ。

而も先生の眞骨頭は、飽迄も純然たる日本人であつた。國家の獨立を維持して、列國と平等位に立ち、國際場裡に馳騒することが、先生の心胸を占めて、寸時も忘るゝことが出來なかつた大問題である。國民の狀態を見れば、國際間の事情に暗く、國家は恰も累卵の危殆に瀕してゐた。『國の獨立を保つの法は文明の外に求む可らず、文明に進むるはこの國の獨立を保たんが爲め』なりとし、『國民たるものは每朝相戒めて、外國交際に油斷す可らずと云て、然る後朝飯を喫するも可ならん』とまで警世の言を發してゐる。或は彼の『瘦我慢の説』に於て、武士たる者の本領を説きたるが如き、或は日清

戰役に際して、國民の奮起を促すと共に、莫大なる私財を軍費の一部に献納したるが如き、一朝國家有事の際には、決然率先して國民たるの義務を盡し、言行の一致を示す等、憂國の至誠に燃ゆる者にあらざれば能はざる所である。先生は其學問を洋學者流にするも、其心を元祿武士とする者であつた。これが世の慣々者流には判らなかつたのである。

體育に就ては、先生自らが體育家であつた。先生の體育たる、決して他人の糟糠を嘗めず、皆自らの創意案出にかゝる健康法であつた。編者の如きも少時、先生獨特の居合を見、先生獨特の米搗の杵の音を聴き、先生獨特の散歩に御供をした經驗を有してゐる。本史の初頭に叙したる如く、今より七十年前早くも體育の必要を觀破せられ、體育に依つて日本國民の體力を増進し、精神を活潑ならしめようとしたのである。修業立志編の中に『體育の説稍々世間に行はれ……我輩年來の勸告も其甲斐ありしことにして、窃に欣喜に堪へざる所』と述懐してゐる。又子弟の教育法に就ては、『先成默身而後養人心』とも言ひ、又『默身先成而人心發達』とも言つてゐる。此等は先生の著書の隨所に散見する先生の主義である。先生の體育獎勵の趣旨は『學理上肉體と精神との間に密接なる關係ありて、身體を健にせざれば、智識を進むること能はざるを以て、學校に體育の設けもあることなり』といふ意見に基いてゐるのであつて、若しその目的とする所を誤り、體育を口實として漫に遊戯に耽り、學業を怠り、不養生を行ひ、不品行を働く者に對しては、これ目的と手段とを混同せる者であつて、言語道斷の次第なりとて一喝を下してゐる。

先生が種々の體育法の中、孰れが最も好きであつたかといふことは、妄に私見を挿んで断ずべからざることである。多數の學生を其傘下に集めてゐられた大師父であつて見れば、學生の爲す所一を偏重して他を排斥するといふことは、決してなかつた。その子弟たり門下生たる者が、嘻々として樂しみ、之に依つて各人の心身を強健にし、智德を磨き、獨立自尊の意氣を養ひ、惹いては國家の獨立、國力の發展に貢献するものであれば、何れも重んじたのである。併し乍らその中でも柔道が好きであつたといふことは、之は敢て編者の我田引水のみではないと思ふ。その愛子愛孫を幼稚舎に托せられ

た際、體育として何を擇ばしめたかといふと、それは柔道であつた。前に其全文を引用したる幼稚舎舍長坂田氏を誠められた書面には、柔術は『少年の衛生には申分なき運動その効或は體操よりも利あらんかと思ふ』と明瞭に認められ、この『大切な柔術稽古』の事實が表へたりとせば、何等かの方法を講じて之を盛ならしめよ、必要とあらば自分が出掛け行つて皆に話してやつても可い、とまで鞭撻されてゐる。當時の幼稚舎の柔術は、丁度過渡期であつて、時勢の進歩と共に、古流墨守の柔術が、今的新しい柔道に轉向せんとしてゐた際であつたから、幼稚舎の柔術の不振亦止むを得なかつたのである。先生が柔道を愛するの極、その昔三田松本町に於ける和田氏の亂暴を深くも咎めず『こんな亂暴が却て塾の獨立を保つ爲になりました』(和田義郎氏の項参照)とし、又山下先生に率ゐられた數人の部員が、一夕三田通りの料亭に於て町内の無頼漢と修羅場を演じた時、先生は之を耳にして大に怒られたが、恰も愛兒の過ちを恕するが如くにして、之を宥してゐられる(山下先生の懐舊談の項)。

後本塾に於ても幼稚舎に於ても、新柔道の下に柔道部が盛になつた時に、先生は非常に喜んで居られた。先生が單に喜びを抱いて居られたばかりでなく、柔道そのものに對しても、一隻眼を有して能く其の奥義を洞見し、或時の大会に部の爲に筆を振はれた彼の有名な『心身之順是柔道』に於て、柔道の如何なるものかを道破してゐられる。前の黙身云々を先生の教への表とせば、是れは其の裏である。此の表裏両面の渾然として融和したる所、其處に柔道が本来の光輝を放つものと思ふ。

又我が柔道部が先生の特別なる恩顧に浴して、それが亦非常に部員の感激奮勵の因ともなつてゐた。先生御在世中柔道部に何か催しがあつて、記念の撮影をするやうな場合には、欣然として部員の間に伍し、カメラに向はれたことは毎度のことであつた。試合の時道場の來賓席に、お孫さんを伴れた先生の姿を見ることも數々であつた。勝負の晩など、慰勞としてお菓子を贈られ、部員の笑顔を眺めて樂しまれたことも數々であつた。部員は先生の御宅に上り、愛作、壯吉、兩中

村君の母堂（先生の長女）の心からなる歓待に依つて、御馳走にもなれば、家族の人々と何等の懸け隔てもなく遊びもした。散歩にお供をすれば、又先生の意を受けて廓清を塾内に行ふ幹部ともなるといふ有様であつた。洵に先生の部員を見ること愛兒に對するが如く情の切なるものあり、部員も亦先生を見ること慈父に對するが如くにして敬慕してゐた。されば先生の喪が發せられた時、三田山上最も傷心斷腸の思ひをなした者は、我が柔道部員であつた。當時寄宿舎に於ける部員等は、切ては大慈父の柩を皆で擔いで、埋葬場までゞも最後の送りをなさんと願ひ出でたのは尤もなことである。併しこれは葬儀の都合上許されなかつたが、その代り皆夫れぐの役割を定めて靈柩に隨ひ、永遠の別れを惜んだのであつた。斯くて二月三日は我等の終生忘るべからざる記念日とはなつた。我が柔道部は、慈父なき後も昔ながらの精神を守りて互に相和親し、相切磋し、年と共に盛大に向つて來た。上大崎常光寺境内地下に眠る先生の英靈よ、尚くは瞑せられよ。

### (三) 月次勝負

三月十六日無級者の月次勝負に次いで、同二十日には有級者の月次勝負が行はれた。其取組を言へば木村、秋山、荒川、角の四人は各々順次に倒れ、吉武出でて角、田鎖、森本の三人を破て濱田に負け、佐藤は濱田、杉浦に勝ちて服部にやられ、服部、向山相ついで高島に敗れ、高島は吉田に、吉田は堀切に、堀切は小寺の倒すところとなる。次に吉堀は小寺、金澤に勝ち、中村に負け、佐野は中村、島津を破つた。又別に中村、島津の勝負があつたが引分となる。田中、佐野を倒して愈々有段者同志の立合ひとりなり、田中、諸遊双方大事を取つて戦つたが、諸遊武運拙なくして終に田中の破る所となつた。

## (四) 第十回柔道大会

第十回の大會は、六月二日に開會された。道場内外諸般の設備前年の如くにして、午前八時より無級者の勝負三十四組を行ひ、正午の休憩後午後一時より、有級者の取組へと移つた。本年は講道館を始め、諸學校、警察署よりの來賓試合者例年よりも多く、塾の有級者は皆外敵に當ることになり、さらぬだに興ある勝負に一層の花を咲かせた。

殊に當日の見ものともいふべきは、眞の技と技との戦ひ、講道館の幼年者と塾の幼年者との間に行はれた四、五組の試合と、向山、田嶺、森本、平賀、大塚、小野、中島等十三組の幼年者が、號令に隨つて一人の動作の如くに演じたる我が柔道部獨特の幼年組體操之形第一種柔之形であつた。又向山、平野兩氏の投之形は、双方巧者の聞えあるもの、其見事なりしは云ふ迄もなく、勝負終了後の山下先生と富田先生の講道館古式之形は、その輕妙なる流石に感服の外はなかつた。左に午後より行はれた勝負丈けを掲げて置く。

來賓の所屬は昨年の如く括弧を以て表はしてあるが、本年は（商）高等商業學校、（獨）獨逸學協會、（美）美術學校等が加はつてゐる。

### 三 本 勝 負

(一) ○ 石 山 某(海)

(二) ○ 西 久 保 治 助

(三) ○ 高 島 一 貫

(四) × 弘 川 某(麻布)

(五) ○ 岡 本 俊(講)

(六) ○ 笹 尾 真

(一) ○ 荒 川 雷 太 郎

(二) ○ 小 野 秀 一

(三) ○ 西 原 久

(七)	澤田 穂(譲)	(一六)×	武田 某(?)	(一五)	田邊八右衛門(專)
○	平賀恒次郎	○	岩崎 某(?)	○	田邊貞治
(八)	武田 實(譲)	(一七)×	長松梅八(高)	(一六)×	渡邊 某(外來)
○	菊地一郎	○	角松之助	○	某(外來)
(九)	澤田 穂(譲)	(一八)	小津 計(高)	(一七)×	竹下 某(譲)
○	木村德太郎	○	三津 浩	○	吉堀誠一
C10 ×	保田收藏(獨)	C10	小泉 浩	C10	朝永 某(譲)
○	谷仙 八(明)	○	木幡 某(獨)	○	吉堀誠一
C11	田鎖藤太郎	C11	濱田精藏	C11	須田嘉平(譲)
○	安田利三郎(商)	○	平賀益吉(神田)	○	須田卓二
C12	森本利三郎	C12	佐藤文彌	C12	田邊八右衛門(專)
○	柳川保三(明)	○	田鎖藤太郎	○	井上喜憲(赤坂)
C13	向山昌治	C13	木村徳太郎	C13	金澤冬三郎
○	諸岡某(海)	○	中川賴基(商)	○	河野休六(赤坂)
C14	松岡正男	C14	堀切善兵衛	C14	山田敏行(專)
○	久野龜之助(美)	○	金井正次郎(譲)	○	小寺源吾
C15 ×	秋山孝之輔	C15	吉武吉雄	C15	大中圭介(日本)
○	青柳某	○	上田一次	○	大中圭介(日本)

(三四) ○ 初段 松 正 實 (講)  
一級 島津 理左衛門  
(三五) ○ 初段 川口 鹿二郎 (講)  
一級 中村 愛作  
(三六) ○ 初段 鹽谷 仁之助 (講)  
一級 佐野 甚之助

(三七) × 五十嵐 忠吉 (神田)  
初段 平田 伸次郎 (講)  
二段 田中 谷謙 (淺草)  
(三八) ○ 初段 田中 信藏

(三九) ○ 二十嵐 岩崎 安治 (下谷)  
初段 佐竹 信四郎 (講)  
二段 遊慎吉  
(四〇) ○ 佐竹 信一 (日本)  
龜崎 忠一 (橋本)

## (五) 雜記

### 柴田氏送別會

先に幹事として、部の爲に大に盡す所あつた柴田一能氏は、愈々本年卒業と共に、エール大學に入學の希望を以て渡米さるゝに付、三月三十日午後六時より、送別會を道場に於て開いた。會する者七十名。幹事島津氏送別の辭を述べ、次いで堀切氏は、柴田氏が柔道部出身、義塾出身者として、將來社會に立ちて一國のチャンピオンたらんことを希望し、又幹事金澤氏は、柴田氏が先頃まで幹事として、又部員として、同部の爲め貢献せられたる所少なしとせずとて、柔道部より木杯一個を贈呈する旨を告げ、先づ其の褒狀を授與せられた。之に對して柴田氏は感謝の意を表すると共に、自己の略歴と自勞自活して此度學業を卒はるに至れる苦心談を語り、更に渡米後の計畫等を述べ、大に後進を啓發する所があつた。後一同晩餐を共にし、種々の餘興に歡を盡し、柴田氏の萬歳を三唱して散會せるは十一時であつた。

## 幹事更迭

幹事倉田敬三氏は從來部の爲に盡す所少なからざりしが、本年に入るや清都北京に赴くことになり辭任せられたるに付その推舉に依り中村愛作氏が後任を囑托せられた。

尙十一月初旬に行はれた體育會各部幹事改選の結果、金澤、諸遊、島津、中村、佐野の諸氏が幹事に重任せられた。

## 部員派遣

本年第二學期中講道館其他各學校に開かれたる聯合勝負又は大會に派遣せられたる試合者左の如し。

○十月十二日講道館へ 小泉浩、秋山孝之輔、角松之助、木村徳太郎

○十一月九日學習院へ 吉堀誠一、柳彌五郎、佐藤文彌、濱田精藏

○十二月一日東京専門學校及び美術學校へは堀切善兵衛、吉武吉雄等諸氏の派遣があつた。

## 進級一括

○二月講道館鏡開式に於て

初段へ 田中信藏

○三月無級者月次勝負の結果

幼年二級へ 木村徳太郎

四級へ 吉武吉雄、松岡正男、角松之助、荒川雷太郎、秋山孝之輔、盛田保三、西久保治助

○同月有級者月次勝負の結果

三級へ 吉武吉雄、濱田精藏、佐藤文彌、服部清吉、高島一貫

二級へ 小寺源吾、吉堀誠一

一級へ 中村愛作、佐野甚之助

○十一月の無級者月次勝負の結果

幼年四級へ 渡邊源吾

四級へ 菅井與平、山田又司

三級へ 小泉浩

## 六 明治三十五年史

### (一) 寒 稽 古

寒稽古は一月十四日より開かれたが、午前四時といへば、未だ夜も明けやらず、吹きすさぶ寒風一入身に沁むに、嚴冬三旬を通じて皆勤したる勇士左の如し。

中村愛作、吉田兵藏、秋山孝之輔、森本利三郎、吉堀誠一、盛田保三、大塚莊亮、杉浦壽作、大中圭介、(以上有級者)丸浦彦十郎、平岡規矩造、塚本太作、西川龜吉、神吉英三、稻村實章、島米八、中野榮三郎、小倉誠介、小川清、山中